

『2016年をどう生きるか』

2016年02月02日

フォトジャーナリズム誌『DAYS JAPAN』2月号は「特集 平和を叫び続けろ」と題し、「2016年をどう生きるか—26人の提言」というメッセージ集を組んでいる。選挙権が18歳からになり、若者に呼びかける編集になっている。短いメッセージだが、インパクトがあり、老人の私にも言葉が届いたので、一部を紹介し、感想を書き加えたい。

山田洋二氏（映画監督）：「若者よ騙されるなど言いたい。大人のいうことを疑ってかかるのは若者の権利だし、ぼくたちの世代が若者だった頃はそうだった。やたらに生意気だったし、けんか腰の論争をよくしたものだ。若者よ自由であれ、賢くあれ、そして蛇のごとく疑い深くあれ。」戦時中は、大本營発表に国民は騙されてきた。現在のジャーナリズムは政府ににじり寄るものが多い。既成観念に捉われず、自由に疑う大切さを思う。

綿井健陽氏（映像ジャーナリスト）：「日本人ができなかったことを説明するとすれば、以下になると思う。日本人は、自らの過ちを自らで総括することができなかった民族である。日本人は、戦争責任や歴史認識を共有できなかった民族である。日本人は、特に中国や韓国など東アジアの人たちへの攻撃性、排他性、差別意識を押しよくすることができなかった民族である。」過ちを認め謝罪することは、決して自虐ではなく、品位ある人間の証である。日本が国際政治に仲間入りできるかどうかは、ここにかかっている。

森達也氏（ドキュメンタリー映画監督）：「だからあなたにお願い。人は武器を手にしたからこれほどに人を殺す。ならば武器を持たない。この決意がどれほどに強い（人類の負の歴史への）アンチテーゼであるかを実感してほしい、そしてもう一つ。安易に群れないこと。主語を一人称単数に保つこと。…これはあなたへのお願いだけど、僕自身への戒めでもある。」自分の言葉を持つことは生易しいことではない。自分の言葉を持つ人は群れることはない。群れない人が主体性を持ち、真の連帯を作り出す。

大田昌秀氏（元沖縄県知事）：「君たち若者こそが未来の日本を造り出す当事者である。政治はいやだ、とそっぽを向いても、政治は疑いようもなく君たちの人生そのものをからみ取ってしまうにちがいない。そのことを念頭に入れて、誰も人間らしい心豊かで明るい、楽しい生活ができる国作りに邁進してくれることを切に期待して止まない。そのためには他人の痛みを自分の痛みとして甘受できる優しい感性が不可欠だ。」苦難を強いられ続けてきた沖縄県人の大田氏が言える言葉である。政治に背を向けるな。あなたの生活がかかっている。人を思いやる心を忘れるな。共に生きるために欠かせない感性である。

むのたけじ氏（ジャーナリスト）：「人類よ、地上あちこちに軍事行動を展開しながら、世界平和を口にするナンセンスはキツパリとやめようではないか。…本気で人類の滅亡を防いで、地球に生き、栄えようとするならば、すべての国々が日本国憲法9条を一斉に振りかざして、人類みんなの生きる姿に変えねばならぬ。」政治家が語る「命と平和を守る」という言葉ほど信用できないものはない。「9条を世界に発信せよ」である。

加藤登紀子氏（歌手）：「文化と文明のせめぎ合いがこの数世紀、地球を引っ掻き回してきた。今はその断末魔のような時にきているのではないのでしょうか？」彼女の時代認識は正鵠を得ている。「戦争には紛争を解決する力はありません。アフガニスタンで中村哲さんが砂漠に水路を築いて頑張っているように、人々が暮らせる緑の土地を取り戻し、安心して暮らせる命の場所を守る!」IS（イスラム国）に集まる青年たちは安心して暮らせる居場所がほしいのである。それが見出せないから、人殺しの虚無に走るのである。